HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アルベール・カミユの青春の思想 ： 彼の世界指向と石化志向基軸の思想 ： その2
著者	佐藤，卓司
引用	北海学園大学学園論集，138：38-55
発行日	2008-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

アルベール・カミユの青春の思想

―― 彼の世界志向と石化志向基軸の思想 ―― その 2

佐　藤　卓　司

序

生命力や知力に限界のある人間は，同時に又モラルや精神の次元でも限界ある存在だと言えるだろう。だからといって自分の生を拒否できるものではない。この世に生を受けたからには生きることが最も重要であり，人間はまずもって生きようとする。

貧困と病気に苦悩しながら人間の運命を鋭く省察したカミユは神（キリスト教）も永遠の生命(永世)も否定し，有限な生を意識しながら自らに与えられた若さみなぎる肉体，清新な感覚，鋭敏な感受性でもって自分の青春を力強く生きようとした。そのカミユが生涯持続するほど深く愛したのは太陽の光に導き出された地中海の自然であった。しかし実存主義思想家である彼はこの自然を感覚的・知覚的次元で愛したばかりでなく，この自然とともにある形而上学的世界にも深く入っていった。

その世界では大地と空そして海の汎神論的融合が叶いそしてそこは現実を超越した観念（意識内容）の世界であり，そして又無機質な石の世界に象徴される生もなければ死もない世界，観念で簡約して言えば永遠性，不動性，不毛性で象徴される世界であったと考えられる。本稿はカミユのこういう特質をになった彼の青春の思想を彼の世界志向と石化志向を基軸にして具体的に考察したものである。

1　自然への愛と世界志向について

アルベール・カミユがアルジェ北部の地中海沿岸のコンスタンチーヌ県モンドヴィ近郊に生まれてからまだ10ヶ月もしないうちに第一次大戦が勃発し，ブドウ酒貯蔵庫の番人であった彼の父はすぐ召集され，１ヶ月もしないマルヌの会戦で瀕死の重傷を負い不運な戦死を遂げた。その結果まだ１歳に過ぎなかったカミユは母親や兄とともにアルジェ市内のベルクール地区の下町の貧民街にある母方の祖母の住むアパルトマンの一室を借りて生活することになった。彼の母親は家族を養うために弾薬製造所で働かなければいけなかったが，二階建ての家には祖母だけでなく，樽製造工場で働く彼の母の兄弟に当たる伯父二人も住んでいた。そしてそこは家具調度品は少なく殺風景で薄汚かった。この家でカミユは幼少時から青春の一時期までの 17 年間を過ごすことに

なったが，少年時代の彼にとり本もなく勉強する場所もないような狭苦しいところだった。

それに彼の母親は幼いころから難聴で読み書きなしの生活をしてきたし，又病身で無口だったので，一家の生活は苦労が多く報われることのない屈辱的で重苦しいものだった。

そして彼は貧困やその屈辱になれて同化したように沈黙に支配されたり，なにごとにつけ無関心にもなった母親の姿を間近に眼にしながら成長していった。

14歳の頃から家が貧しいために彼は船舶仲買人や気象測候所，自動車のアクセサリーの店などでアルバイトしていたが，それまでの栄養不足の生活がわざわいして17歳の時発熱し喀血までしたために入院することになった。以後結核の息苦しさ，失血，呼吸数の減少から呼吸できなくなるという不安に悩まされ，死を深く意識し生と死の問題にとらわれるようになった。

幸いにも彼は母の姉が嫁いでいたアコー叔父の元に2年間寄寓することになり，栄養豊かな食事でこの病気から次第に回復していった。そして彼はこの伯父の家にあった家庭的図書館で大いに読書し文学や哲学の教養を身につけていった。

その上海を愛した彼は海水浴に親しみサッカーをする熱烈なスポーツマンになり，心身の鍛錬を通じて故郷の自然にも親しんでいった。そして結局彼は青春の時期は勿論のこと，故郷の自然に生涯深い愛着を抱き続けるようになったのだが，それというのもこの自然が，水泳やサッカー等の野外スポーツに熱中できる場を提供してくれただけでなく，元来人間の心を解放させなごませてくれる自然に対する普遍的感情もさることながら，このこと以上に「自然の構成要素との直接的つながりの中で見たり，感じたりするもの全てを知っているアルジェリア在住のフランス人固有の性質にめぐまれていた」

《……parce qu' il est doué de cette nature propre au peuple pied-noir qui sait voir et ressentir autrement, dans une sorte de proximité directe avec les éléments.》[(1)] と指摘されただけでなく，この自然に対する彼自身の特別の捉え方とか感情を抱いていたからだろう。

すなわち彼にとって貧困とは全てを欠く，つまり何物も持たないような境遇を意味し，それだけ自然と最も身近に接して生きざるを得ないという日常の必然性を比ゆ的に暗示するにせよ，豊かな想像力，鋭敏な感受性とか清新な美意識に恵まれていた彼は深くこの地中海的自然を愛することができたので，貧困がもたらす屈辱的境遇をになったこの必然性を宿命のように甘受したり諦観したりする受身の姿勢にとどまることなく，自然により直接的に接して生きることを暗示する貧困であるからこそ自然により深く満ち足りることを知ることになるんだという，つまり本来人生の不幸に至るはずの貧困が必ずしも不幸には至らないんだという逆説的捉え方を正当化する彼独自の自然感情が優先していたようだ。そして彼は自然に相接して生きる姿勢に誠実さのモラルの教訓をくみとり，このモラルを天啓にまで高めた価値づけをしている。すなわち自然の構成要素との直接的なふれ合い，自然を直接的に日夜享受し続ける非文化的生活が文明の恩恵にあずかる人間にとって真の幸福にはならないにもかかわらず，文明社会で有償化された価値である財産，金銭あるいは地位などの恩恵は受けなくてもよい，空に光り輝く太陽，そしてその光に照り

映える海や浜辺，銀白色の波，糸杉と夕日に映える丘，あるいは乳香樹やアーモンドの木々の森，草花と野原それに岩石が対照的な美しさを呈する森の風景等の原始のままの光に導かれたこの自然の中で「値のつけられない恩寵」つまり天の恵みが無限に降り注いでいる，それも無償で提供されているのだから，無一文の状態，何も持たないような裸の状態を示唆する貧困に生きる人々にとってこの「光の富」を享受することは何物にも変えがたい貴重な財産になるんだという信念が彼の地中海的自然崇拝の賛歌の中から窺われる。

事実青春時代の彼はこの自然に対しては心身ともに裸の状態になったかのような何のわだかまりも隠し立てもない純真さで接近し，光の世界に没入して光をむさぼるようにして生の充実感をくみとって，絶望対喜びという相対立した感情まで一気に否定しようとした。

「世界は光に浴していれば，太陽が照りつけていれば私は愛したり抱きしめたくなるのだ。光にもぐりこむように肉体にもぐりこみ，肉体と太陽の湯浴みをしたくなる。」

《Quand il est dans la lumière, quand le soleil tape, j'ai envie d'aimer, de me coucher dans des corps comme chez lumières, de prendre un bain de chair et de soleil.》(2)

「空や空から降り降りてくる光まばゆい熱気を前にすると，絶望も喜びも私には何一つ根拠のないものに思えてくる。」

《Ni le désespoir, ni les joies ne me paraissent fondés en face de ce ciel et de la touffeur lumineuse qui en descend.》(3)

人間は生ある限り生の持続の意識に従って生きているが，それでも死と表裏する生の矛盾した意識である絶望とか不安は自己存在意識の中に本質的にとりついているもので決して解消しきれるものではない。そういう矛盾した心理に取り付かれながらも病気や貧困に立ち向かおうとする彼の負けじ魂がそのまま光の世界へ自らをあずけたいという純粋一途な姿勢となって反映されている。

「世界から離れてはいけない。人生が光にさらされている時，人生をやりそこなうことはない。どんな地位にあっても，またどんな不幸や幻滅のさなかにあっても，私の努力の一切は世界との絆を見出すことだ。」

《Ne pas se séparer du monde.　On ne rate pas sa vie lorsqu' on la met dans la lumière. Tout mon effort, dans toutes les positions, les malheurs, les désillusions, c' est de retrouver les contacts.》(4)

そしてこのような彼独自の世界志向には世界との絆を見出そうとする強い願望が認められ，同時にそこにはどんなことがあっても自分自身を見失うまいとする強い個性が窺われる。

それで彼のこの世界志向とはどういうものなのかというと，彼の哲学の師匠のジャン・グルニエ（Jean Grenier）が自然の奥にある宇宙への観想によって心の空虚さを充足にとってかえたように「持続する空を見つめる」《contempler le ciel qui dure》(5) ことによって人間の運命とは別次元の世界に接近しこの世界の一部になろうとすることであった。カミユは 1935 年の 8 月のある

日熱風を運ぶ荒れ模様の空の黒雲とは対照的に，東の方に透明な青さをたたえた空に感動するだけでなく絶望感をも味わった。

「8月の荒れ模様の空。焼けるように暑い風が吹いている。黒い雲。だが東の方に青い，えもいわれない美しい透明な空が帯のように広がっている。その空を見つめることはできない。その存在は，目と魂にとまどいを覚えさせる。美は耐えがたいからだ。できれば時間の流れに沿って無限に引き伸ばしたいと思うこの一瞬の永遠性が，ぼくらを絶望にかりたてるのだ。」

《Ciel d' orage en août.　Souffles brûlants.　Nuages noirs.　A l' est pourtant, une bande bleue, délicate, transparente.　Impossible de la regarder.　Sa présence est une gêne pour les yeux et pour l'âme.　C' est que la beauté est insupportable.　Elle nous désespère, éternité d' une minute que nous voudrions pourtant étirer tout le long du temps.》(6)

永遠を前にすると人間の生ははかない一瞬の存在でしかない。それでも人間は自らの生が持続する限り持続する意識の流れにのって永遠の時の流れに自らを連ねようとする。

そういう時折意識されたであろう願望が，たまたま青空のたえなる美しさを眺めていた彼を感動させて彼に特権的瞬間を味わせたのだろう。

この時彼は永遠を前にしたら一瞬の存在にすぎない自分を時間的次元で「無限に引き伸ばして」永遠性に連ねさせる，つまり「一瞬の永遠性」を味わったのだろうが，その空の空間的無限性に飲み込まれそうになって凝視し続けることができなくなり，その壮絶な美しさに彼の目も魂もはじきかえられそうになって絶望感を抱いたのだろう。しかし人間は死を前にしては死から生へと本能的に自らをひるがえして自らの身を守りパスカル的意味の気晴らしをするように，絶望に陥ってもそのうち希望の中に生きようとする。そういう基本姿勢を保持することではカミユも例外ではなかったであろう。しかしカミユにあってはこういう普遍的希望だけではなく，彼の孤高な魂とか神聖さへの感覚，あるいは神秘的霊性を感じ取る鋭敏な感受性が超越的で絶対的な観念(意識内容)の世界に向かわせたのだろうと考えられる。しかしながら人間存在を超越するこの絶対的な世界は人間の生も人間性も拒絶する虚無と無感動の世界でもあった。このような特質をになった彼の世界志向は彼の作中人物をして敢えてこの世界に接近させそこに同化させようとさせる。

すなわち彼は作中人物（メルソーやムルソー）をして彼等自身の死を招くような状況の中で彼等に自己破滅型の生き方をさせて，結局若死にさせて自身の死に同意させることによって世界の虚無に連ねさせたのである。であるから彼の世界志向とは死に同意することによって世界の虚無に連なろうとする意識内容もその範疇に含まれるであろう。そうはいっても「ジェミラの風」《le vent à Djémila》で「私は死を恐れあるいは死に挑戦する」《j' en ai peur ou je l' appelle》(7) と正直に告白した彼は現実の死に同意する前にまずもって死に反抗する。死後の生はなくそれ故死に

よって限界づけられた生こそ唯一のゆるぎない生なのだし，それに第一自分には人生の前半の生である青春がある，病気に追い詰められていた彼の孤高な魂はこの二度と来ない青春に自らの「生命力の組織的燃焼」《épuisement systématique de la vie》[8] をはかり，若さみなぎる身体と感覚でもって青春の特権を可能な限り享受しようとした。

その上彼が自分の青春をひたむきに激しく生きようとした背景には熱烈なギリシャ思想の礼賛者で神秘主義思想家の前述したジャン・グルニエの教化もあったようだ。この哲学の師匠から数冊の読み物を与えられて，病気と闘い苦悩しながら青春の激しい生き方を求めていたカミユは強い関心を持ってニーチェ（Nietzsche），ドストイエフスキー（Dostoïevsky）等の作品を熟読した。

「当時彼はニーチェ，ドストイエフスキー，ジイドはもちろん読んだ。彼が賛美していた指導的な始祖と神秘神学（神秘思想）を読んでいた。病気でこの時期より重苦しい実存の重みを背負っていたカミユはこれらの絶対的な作家の，熱烈な信念をもって熱狂的に自らを選びたいという思いにかられている霊的意味をもった魂が自分にはあるんだということを打ち明ける程，彼等の一徹さ（非妥協性）に夢中になっている自分を感じた。」

《il lit alors Nietzsche, Dostoïevski, Gide bien sûr, le maître fondateur, et les mystiques aussi qu'il admire. Ā cette époque mêlée, Camus, que la maladie a chargé d' un poids existentiel plus lourd, se sent transporté par ces écrivains de l' absolu, par leur intransigeance au point qu' il confie qu' il a "une âme mystique qui brûle de se donner avec enthousiasme, avec foi, avec ferveur."》[9]

彼は「これらの絶対的な作家」《ces écrivains de l' absolu》に妥協を許さない強烈な生への意志と狂おしいまでの大地への執着と超越的な霊感を感じ取っていたようだ。

そして不安と失望，挫折とか苦悩を拒絶するように反抗することによって彼自身緊張し収縮した意識をにないながら，運命の力に匹敵するような世界を地中海的自然の裏側に感じとっていたようだ。

そんな時彼は生身の肉体から発散される青春のエネルギーに支えられた情熱の激しさが新鮮な感覚を伴って心のうちにある不断の膨れ上がりたいという一種の膨張作用と調和し彼自身の心身の高揚の中でこの世界との汎神論的融合を叶えさせようとしたのが「チパザの婚礼」《Noces　à Tipasa》である。

アルジェ（Alger）西方 65 キロ，サヘル（Sahel，北アフリカ地中海沿岸の丘陵地帯）の向こう側にあるチパザへはカミユ一人でやって来たこともあるが，エキップ一座（Théâtre de l' Equipe）の仲間や見学客といっしょにもやって来た。そのチパザでの強烈な太陽の光と大地とのむせ返るような「巨大な熱気」《la chaleur énorme》を受けて草花や潅木の色彩と芳香が炸裂した。この大地の植物が太陽の光と熱気を吸収して発酵した結果生じた「大地の精気」《des essences de la terre》を彼は自分の身体と感覚でもって受けとめ，その後水泳することによって大地から海へそ

の精気を引き渡し大地と海との汎神論的融合を叶えようとした。この大地と海の熱烈な応答を彼は心身のエネルギーの燃焼を通じての高揚の中で受けとめて，青春の生命力の充実を即座にくみとりながら世界と自分との親近性を感じ取ったのだろう。

しかしチパザの悠久な自然を観想している時も，空，海，大地の単純だが雄大な自然の公正厳密な摂理をも感じ取ったのだろう。

とりわけ芳香植物に対する感覚器官の充足が神聖さへの感覚に支えられて知的明晰さとか統一への欲求を宿す心を取り込もうになりながら，自然の奥深い秩序とその荘厳さを感じ取るなかで「大地全体の歌」《le chant de la terre entière》，「世界の鼓動する中心」《le coeur battant du monde》に自分が結びついているという，世界と自分との崇高な一致，この感動こそ彼の大地に対する大いなる愛，狂おしいばかりの愛を象徴していると言えるだろう。そして太陽の光と空，海，大地との間で交わされる悠久な自然の営みの中に，あたかも原始の自然がよみがえったかのような奥深く，荘厳で神秘的な雰囲気の中で彼の原初的な感動は生涯彼の心に強く刻まれたようだ。

「優美と野生美，喪失感全てを保護している感じが一度に混合している光景を前にしてカミユの仰天（茫然自失）ははかり知れない程大きく生涯持続することになる。」

《La stupeur d' Albert Camus devant ce spectacle où se mêlent à la fois la grâce et le sauvage, le sentiment de la perte et la sensation de tout détenir est immense et perdurera tout au long de sa vie.》(10)

こうして彼の生涯にわたって持続する程深い愛着を抱いてきたチパザをはじめとする地中海的自然は，人間社会とか文明との共存を視野においた自然ではなく，原始のままの奥深く荘厳な息吹をたたえた自然であり，それも「人間のいない自然」《nature sans hommes》の非人間性が永遠性，不動性，荘重性と結びついた神秘の世界であり，彼が「神と崇めた世界」《le monde dont je faisais ma divinité.》(11) に彼の心は帰っていこうとした。そしてこの彼の世界志向性は社会や人間の運命から遠ざかり，非人間的世界の一部になることであったので，運命から逃れられない自分から超越的に自己離脱していこうとする離人化傾向も帯びたようである。それではここで彼の世界志向性はどのように自己離脱し，離人化していったのかを彼の作中人物及び彼自身に当たって具体的に検討してみよう。

2　石の観念中心に捉えた自己石化志向と この志向が内含する超越的上昇志向について

『幸福な死』の主人公メルソーは金持ちで両脚をなくしたザグルーから金銭によって獲得した自由な時間の享受こそ幸福になることだと聞き知り，肺を病み発病して病身の彼はそういう自由にひきつけられた。一方金持ちの自由な生活とは全く無縁で，いくら働いても世間から見捨てられ

た存在として孤独と無力の惨めな生活を送っている樽職人に深く同情していた彼は，自分の恋敵でもあるザグルーを殺害し彼の金庫から札束を奪い取り中央ヨーロッパへと逃亡し，その後北イタリアを通過してジェノヴァからアルジェに帰った彼は湾を見晴らす高地にある「世界を前にした家」《la maison devant le monde》で三人の女子学生と共同生活をしながら仕事にとらわれることのない自由な身の青春を享受していた。そして心の中では自分自身や他人から解放させてくれるものと思っていた死の真実の予知となる世界に心を開こうとしていた。

彼は肋膜炎を患いながらも友達とシエヌーアの山に登りそこのきつい斜面に打ち勝とうとして必死になって登攀しているうちに酷暑と疲労で失神したり，又その後も体力が衰弱しているにもかかわらずに夜間水泳するという無謀な冒険を重ねて死の床に伏してしまった。そしてとうとう自分自身の死を前にした時になって余力少ない生のエネルギーの燃焼をはかりながら死と格闘し，

「石の中の石となって不動の世界の真実に彼の心は歓喜しながら帰っていった。」

《Et pierre parmi pierre, il retourna dans la joie de son coeur à la vérité des mondes immobiles.》(12)

こうしてメルソーは肺を病みながらも自らを死に追いやる冒険を重ねて結局死と相対することになった時，自己石化して石の不動性を汲みとろうとする。換言すれば彼は死に至る最後の瞬間まで自らの死に石の不動性をもって相対したと言えるだろう。

一方神話上の人物のシーシュポスは山頂まで岩を持ち上げなければいけないという非常に重い刑罰を神々に課せられる。彼はこの岩を渾身の力を込めてかかえ持ち上げて上の方へと運ぶのだが，その重圧に耐えかねて手放し，落下していく岩を見つめながら再びその岩を支え持ち上げようとして降りていく。そしてこの事を死ぬまで繰り返さなければいけないというこの生涯かけても叶わぬ言語を絶した過酷さこの上ない労働を背負って生きていく。

シーシュポスは，無益な反復すなわち不毛の象徴となった岩との格闘を死ぬまで繰り返すのだが，それでも同時に又岩を持ち上げる大いなる苦痛，そして体力の限界とともに岩を手ばなしてしまう。この時転がり落ちていく岩を追って下のほうへ降りていくこの休止の間，この自らの不条理な運命を堅固な意志と不屈の忍耐でもって受けとめながらも，岩の不毛性と格闘してきた現実の体験が彼自身に宿り，「これ程まで間近に石と取り組んだひとつの顔はすでに石そのもの」《Un visage qui peine si près des pierres est déjà pierre lui-même.》(13) と化していく。

確かにシーシュポスのこの自己石化には人間の力の限界を大きく超越する拡大強化された超人的力のエネルギーの燃焼が託されていて，いかにも神話の人物にふさわしい事大主義的で過度に誇張された人物像が認められるが，カミユが最も関心抱いているのは「神々のプロレタリアート，無力でしかも反抗するシーシュポスは自分の悲惨なあり方をすみずみまで知っている」《Sisyphe, prolétaire des dieux, impuissant et révolté, connaît toute l' étendue de sa misérable condition:》(14) という事であり，まさにこの岩との格闘が休止して彼が意識的になるこの時にある。

そして人間の力の限界を示唆する岩との格闘よりも，この余りにも過酷で無益な労働の代価はこの人物をして人間の悲惨で悲劇的なあり方を深く自覚させ，カミユ自身はシーシュポスのこういう生き方の究極の姿を高次の奇特な人生の教訓にしている。

こうしてカミユは二人の人物の自己石化を通してメルソーには石の不動性によって死に相対させ，シーシュポスには石の不毛性と格闘させて不条理な運命を生き抜くことの悲劇的な生き方を称えている。

しかしこういう彼等の石化志向は石の言及や石の誘惑とともにカミユ自身にも認められる。古代ギリシャ文化の洗礼を受けた彼の感受性とか想像力は彼が生涯愛した祖国アルジェリアの，ついでギリシャの自然が共有している地理的・風土的類似性すなわち「継ぎ目のない空，海岸，石ころの多い青みお帯びた丘」《leur ciel sans blessure, leurs plages, leurs collines rocailleuses et bleutées》(15) のある地中海沿岸の浜辺を中心に灌木地帯，森林や野原の自然風景の示唆うけて展開したようだが，自伝風エッセイ『裏と表』，『婚礼』それに『手帖１』の随想風断章あるいは青春が既に終わっていたことを示唆する『夏』等の諸作品の自然描写の中に世界とか世界志向を示唆する表現とともに使用されているが，これまで述べてきた二人の人物の石の不動性とか不毛性という観念は，所詮希望とか不安が日々念頭を去来するような意識内容に連なるもので格別強く意識されるわけでもないし，人間の行動を支配するほど強い影響を人間に与えるわけでもない。

しかしながらこの二つの観念は死とか宿命というメルソーやシーシュポスの人生を決定づける死とか運命に対立したり同化したりする重要な観念になっているだけでなく，今取り上げたエッセイやノート等の諸作品に顕著に認められる彼自身の石化志向にも深く関わっているので，カミユの青春時代に形成された石化の思想をもっと正確に理解するには，不動性，永遠性，不毛性といった観念を含む人間が石に対して抱く他の観念とか石の比ゆ的特性，石の利用度を含むその存在価値等の観点から総合的に比較検討することが必要であろう。

そこでまず前述したメルソーやシーシュポスの自己石化志向の目標になっている不動性，不毛性の観念はその他の石の観念を含めどのようにして人間の心の中に生じるものなのかをここで考えてみよう。

太陽の強烈な熱と光にさらされ続けた結果としての自然は極端な少雨（旱魃）が持続した場合，結果的には無数の砂，小石，岩石等からなる砂漠と化す。砂漠は太陽によって「引き裂かれ，焼き尽くされた」《déchirée et brûlée》(16) 結果としての不毛の大地と化す。

この砂漠を構成する石，砂，砂礫や岩石は砂漠以外にも地球上の大自然に数え切れないほど多く存在しているが，これらに共通の特質は石に象徴されるように生命力も生の機能もない無機質の物質であるから水を全く必要としないし，人間が寿命が尽きるように生→壮→老→死という生命あるもの全ての循環的事象を繰り返しながら結局は腐敗・解体していくその種類が数え切れない程多い生物群と比較すると，長年の風雨にさらされながらの風化作用の影響は受けても，その変化はわずかで目立ちにくい。つまり石は岩石や砂を含めてもその機能は無機的であることによ

り生命がないから生物のような生とか死はないことになる。こういう石のになう本質が，人間の心の中に何の反応も変化もしにくいということで，無反応性，不変化性という比ゆ的観念（意識内容）を抱かせる。

又石は不毛な砂漠の構成要素として石自体からは何も生じない，生み出されにくいということで砂漠の象徴である不毛性の観念にも連なる。

その上石自体は非常に密度の高い堅固な物質であるから強烈な太陽の光や長年の風雨にさらされ続けても，あるいは又人工的に爆破されてもその原形は保たれやすいという点で永続性の観念をになう。以上のように人間が石に対して抱く諸観念（意識内容）について説明したが，これ以外にも先述したように石の存在価値とか形象価値を石への関心の度合いとか石への比ゆ的特性を含めて総合的に図示して，カミユの石化の思想を詳細に検討するための判断の目安にしたい。

石のイメージとその実質		非常に密度の高い堅固な物質（固体）で無機質			
石の形態		小石	砂利（砂礫），砂	岩石	石ころ
石全体に共通の観念					
無反応性	→	有	有	有	有
不変化性	→	有	有	有	有
不毛性	→	有	有	有	有
永続性（永遠性）	→	有	有	有	有
石全体に非共通の観念					
不動性（荘重性）	→	無	無	有	無
対石への形象価値					
（審美的な対象価値）	→	有	有	有	無
石の利用度とその利便性	→	有	有	有	有
石の存在価値	→	有	有	有	無
対石への比ゆ的特性	→	石のように堅固な人（意志）			
	→	石のような堅忍不抜の努力			
	→	石のように頑固で閉鎖的（石のような沈黙）			

事実カミユは青春時代にしばしば訪れたチパザで石の永続性とか不動性の観念を強く抱くきっかけとなるような石の世界の啓示を受けた。チパザでは広大無辺の空に太陽の光はまばゆく輝き，単純だが奥深い自然の豊かさを伝える大地は彼の心身を洗い清めてくれた海を明るく照らし出していただけでなく，古代ローマの植民都市だった廃墟にも濃密な光を降り注いでいた。

永続的な時の流れの中で摩滅して廃墟と化した石柱群の石の世界を観想しながら彼は原始のままの自然が蘇ってくるような素朴ながらも，不思議な神秘と時空を超えた威厳の混じった感動に

とらわれたのだろう。

他にもこのチパザの廃墟と共に彼にとっては親しみなれたチェヌーアの「重々しく頑丈な山」《cette lourde et solide montagne》はチパザ湾の西方に沿って下降しているが，そこから立ち上がる水蒸気が少しづつ濃くなって海水の色を帯びていきながら，空と混合して凍りついて動かなくなったような不動の虚空に転変する自然現象の中にあっても何ものも揺り動かしえないような不動性の神秘に心打たれたようだ。ここも永続性とか不動性の観念が結びつくところであった。しかしこれ等の観念がチパザの廃墟やチェヌーアの山塊だけでなくオラン西方に沿って岩のような堡塁のあるサンタ・クルスの丘と結びつき「カナステルの赤い断崖の足元に広がる不動の海」《Canastel et la mer immobile au pied des falaises rouges》(17) と共にその岩だらけのどっしりと安定した重量感が「不動のサンタ・クルス」《Santa -Cruz immobile》の丘となって永続性以外にも岩の喚起する不動性とか荘重性の観念が彼の心を捉えていたのだろう。

しかしこれ等の観念を喚起するのは岩そのものとか岩からなる丘や断崖の風景ばかりではない。彼は又オラン地方の海に向かって展開するこの広々とした浜辺全体の風景も岩だらけの断崖にも匹敵する「久遠の天地」《Un excès dans l' indifférence》のように思われ，歴史とか人間を超越して大地の悠久性へと連なっていった。

確かに人間の歴史は勿論文明の歴史でもあったがそこには動乱も数多く発生し，人間が創造した文明は動乱により破壊されてきたので，歴史は創造を積み重ねる一方では破壊も繰り返してきた。しかしながらカミユの関心は人間が創造した文明とかあるいはその創造や破壊の歴史に向かうよりも有史以前から大地の中核を構成してきた石の原初的な世界に向けられ,「世界はいつもついには歴史に打ち勝つ」《Le monde finit toujours par vaincre l'histoire.》(18) ように非常に堅固な物質であるが故に何物によっても破壊されにくいまま永続的にその原型を保ってきた石の世界をその空間的不動性よりも時間的永続性によって，動乱と破壊ゆえに時間的次元において変遷を辿ってきた歴史に優先させたと言えるだろう。

確かに人間は永遠で不動なものに対しては憧憬の念を抱くが，所詮人力をもってしては到底及ばない人間自身をはるかに超越するものに対しては畏怖の念の混じった諦観でもって受けとめ，心の中ではその憧憬の念が単なる受動的観念にとどまってしまうことは大いにありうることだろう。しかしカミユはこういう受動的観念にとどまることなく神聖さの感覚や意志でもって永遠で不動な抽象的世界に同化すべきことを目指して超越的に自己離脱するような上昇志向が感じ取れる。つまりメルソーやシーシュポスはじめカミユ自身の石化志向には石とか岩の現実あるがままの自然な存在形式とか実質を超越したより上位の形而上学的観念とも言える永続性，不動性，荘重性が石の世界に託されていて，これらの観念への超越的同化志向が認められる。

その上貧困とか病気に対する彼の負けじ魂は努力とか節度による自己統制というストイシスムをよく受け入れ，彼の心の中での不断の膨れ上がりたいという膨張作用ともよく調和していたことがそのまま彼の場合神聖さの感覚にとどまらず，神聖さへの意志にも連なるものであったと言

えるだろう。すなわちそれだけ強く彼自身神聖さを求めていたと言えるだろう。そして彼が自らに認めている神聖さへの感覚がその意志にまで強まっていたとすれば，自己上昇志向の中にある不動性とか永遠性という非人間的世界の超越的観念をそれだけ強く彼自身求め，超越的自己離脱志向にまで向かったものと考えられる。

以上のことから自己石化志向も世界志向同様に超越的に自己離脱して非人間的なものを自らにくみいれようとすることだったと言えるだろう。しかしこれら双方の志向には別の特質も認められるのでそれはどういうものであるのかを次に検討してみたい。

3　自己石化志向が内含する虚無的無化及び否定志向とムルソーの世界について

1936 年秋彼はエキップ（L' Equipe）座（劇団）の挿絵画家マリー・ヴィントン（Marie Vinton）の操縦する小型飛行機でジェミラ（Djémila）へ旅行し，トラヤヌス帝の植民地遺跡（共同浴場，劇場，寺院，凱旋門，広場その他の石の列柱）のある岩石の多い，高い山々に囲まれたここの台地で，そこを吹きすさぶ風にマスト（帆柱）のように全身をさらし揺さぶられ続けるのだが，この時の自己石化志向も石のイメージとか観念を心の片隅にとどめおくだけのものではないことが次のようにはっきり分かる。彼は結局この風に飲み込まれそうになった。その後この風に融合したようになって彼の心は，

「その力は私の血液の鼓動と自然のいたるところに現れているあの心臓の力強い響きをかき混ぜていた。そしてつかの間の抱擁は，小石の中の小石である私に一本の石柱の孤独やあの夏の空の一本のオリーブの木の孤独を与えてくれるのだった。」

《……et puis elle enfin, confondant les battements de mon sang et les grands coups sonores de ce coeur partout présent de la nature.……. Et sa fugitive étreinte me donnait, pierre parmi les pierres, la solitude d' une colonne ou d' un olivier dans le ciel d' été.》(19)

そして

「まもなく世界の四隅に拡散され，自分を忘れ自分からも忘れられて風となり，この風の中でこの熱っぽい感じのする円柱やアーチ，敷石となり人気のない町を取り囲む青白い山々となる。」

《Bientôt, répandu aux quatres coins du monde, oublieux, oublié de moi-même, je suis ce vent et dans le vent, ces colonnes et cet arc, ces dalles qui sentent chaud et ces montagnes pâles autour de la ville déserte.》(20)

のような状態になった。

このように風の力に相対する自分の力の抵抗，そしてその力が尽きたようになっての自己放棄の中で，風の力に汲みこまれて風の一部となった彼自身や周囲の自然の構成要素をまきこみながらこの風は合体した一つの大きな力強い響きをかもし出していた。こうして風の力に自己放棄の

形でくみこまれながら，同時に「小石の中の小石」《pierre parmi les pierres》となっていた彼自身は古代ローマの遺跡として既に文明の光沢を失って久しく，結局は石に還元されてしまったこれらの円柱，アーチ，敷石あるいは岩石の多い周囲の山々にまで同化してしまう。しかし彼の自己石化志向はこれらの石の世界だけに限定されることはなく，糸杉とかオリーブ等の石以外の自然の構成要素への転化志向となって拡散される。そして「自分自身からの離脱」《mon détachement de moi-même》であり同時に又「世界での自分の現存」《ma présence au monde》(21) であることが彼自身から告げられる。つまり彼の自己石化志向は彼自身超越的に自分から離脱することによって石中心に他の自然の構成要素にも自由に拡散しながら自己同化しようということなのである。

そして「人間的なものから解放された人間と大地との間で交わされた愛にみちた和合」《cette entente amoureuse de la terre et l' homme délivré de l' humain》(22) を強く求めていた彼は太陽に照らし出された石だけでなく，糸杉やオリーヴのある丘や深い真っ青な空が展開する地中海的自然の中の非人間的な摂理に世界の真実を見出そうとした。彼が1937年9月二回目のイタリア旅行をした際，フィーエゾル（Fiesole）という古代エトルリア（Etrurie）の都市で遺跡もあり高台からの眺望も美しいこの町の風景の調和を前にして，そこの非人間的な美しさに圧倒されそうな感銘を受けたが，そこでは《人間のいない自然》の奥にある抽象的世界は彼自身を含め人間の心や精神を否定して無価値なものにしてしまうように思われたのだろう。

「世界は美しい。そして全てはそこにある。その風景が辛抱強く教えてくれた偉大な真実とは精神はなにものでもなく，心も又然りということだ。そして太陽が暖める石や，ぽっかりとのぞいた空にすくすくと伸びる糸杉こそ，《道理がある》ということが意味をもつ唯一の世界を限定している。そしてその真実とは《人間のいない自然》ということだ。この世界は私を空しくしてしまう。それは私をとことんまで運んでいく。そして怒りもなく私を否定する。」《Le monde est beau et tout est là.　Sa grande vérité que patiemment il enseigne, c' est que l' esprit n' est rien ni le coeur même.　Et que la pierre que le soleil chauffe, ou le cyprès que le ciel découvert agrandit, limitent le seul monde où《avoir raison》prend un sens : la nature sans hommes.　Ce monde m' annihile.　Il me porte jusqu' au bout.　Il me nie sans colère.》(23)

モーリス・バレスが「年月を超えるこの丘の恒久性とその太古からの聖性と，その魅力と丘を包み込む神秘性」によって《Par sa permanence à travers les âges, par l' antiquité de son caractère sacré, par la fascination qu' elle exerce et le mystère qui l'entoure,》(24) 寓話的要素を盛り込み神話的雰囲気をかもし出す『霊感の丘』となるシオンの丘に「《精神が息づく場所》を求めて上がったが，反対にカミユはジェミラの丘で，それが《精神の否定である真理が生まれるために，精神が死ぬ》場所であることに喜んでいる。」，つまりカミユは精神の存在を否定しようとするのだ。

これまでとらえてきたように彼の石化志向は石の世界の非人間性を人間的であることに深く関わってきた人間性とかモラルよりも優先しているので，「ジェミラの風」の冒頭のこの一節は『霊感の丘』の一節のパロディ（もじり，つまり巧みに真似て風刺的要素を加えたもの）だけとはみなされ得ない精神の否定視傾向が彼自身の中にあると考えられる。

彼がこの「ジェミラの風」の中で告白しているように，「未来とか，よりよい存在とか，地位という言葉」，「心の向上」《les mots d' avenirs, de mieux-êtres, de situations》，《le progrès du coeur》(26) 等は現在の可能性を保障することにはならないまま未来へ先延ばしして漠然と希望に連なることになり，そういう未来への期待を内含する精神は否定視されている。自己存在意識である精神，その精神の作用である自己向上への欲求は結局不安と表裏する希望と同類で，自分自身の能力とは必ずしもかみ合わないことに対する抵抗を彼は心の中に抱いていたようである。彼自身は理性とか節度のモラルといったストイックな精神面を否定しているのではないが，哲学的・宗教的題目に精神を集中させながら自己形成を目指す過程で精神的になろうとする人間には批判的のようである。

このように自らに与えられた能力にかかわる精神とかストイックな精神面を彼は否定しないが，精神の作用を先延ばしにするように精神的であろうとする人間には批判的であることは指摘できるだろう。その上世界の非人間性をくみ取るべく非人間的になり，人間とか人間である自分自身を存在なきものにしようという強い否定志向がはたらいて人間の存立要件である精神を心情とともに否定したとも言えるだろう。

確かに人間には否定の感情が恒常的にはたらいて，何かにつけて意のままならない世の中をはかなみ疎んじ，どうせこんな空しい世の中には存在しない方がましだと取り何もないことの方をよしとして無の世界を願望したりする。虚無主義者のカミユも自分自身を存在しない方に導こうという自己無化志向には同意しているようだ。この同意を文字どおり解釈すれば何の反応も変化もない，又そこからは何も生じないことをよしとすること，すなわち人間が石に対して抱く時のような無反応性，不変化性，不毛性といった石の観念を自分に受け入れることを意味するだろう。しかしカミユは無の世界を一時的に願望したり，この世界を失望とか諦観でもって受けとめながら生きていく受身の姿勢に組しようとはしない。反対に彼は１で既述したように青春の特権を享受するために時には激しく心身を燃焼させて可能な限り青春を汲みつくそうとさえした。そのためにはメルソーのように自らの死期を早めるような無謀な冒険を重ねたり，あるいはムルソーのように殺人犯として処刑されたりして死に至るのである。つまり二人の主人公は自らの死を顧みないくらいに過度に激しく強く生きようとしたのである。このように死とか運命に挑戦するかのように自らの死期を早めるほどの過度な「生命力の組織的燃焼」をはかる彼等には，自分の生命さえ顧ないようなそして自分自身を含む全てを否定しようという破壊の意志を胸に秘めた強烈な否定志向が感じ取れる。事実カミユ自らがこういう強烈な否定志向を石の世界に託している。

「おのれを滅し，全てを否定し，何物にも似ず我々を規定しているものを永久に打ち砕き現在

に孤独と虚無を捧げ，運命が絶えず繰り返される唯一の発着所を探し出すということには目くるめくような陶酔がある。誘惑は果てしなく繰り返される。」

《Vertige de se perdre et de tout nier, de ne ressembler à rien, de briser à jamais ce qui nous définit, d' offrir au présent la solitude et le néant, de retrouver la plate-forme unique où les destins à tout coup peuvent se recommencer.　La tentation est perpétuelle.》(27)

そしてカミユが32歳になった1945年の9年後に刊行された『夏』では，

「石と一体化してその歴史と動乱を物ともしない焼けつくような無感動の世界に溶け込もうという誘惑」《quelle tentation de s' identifier à ces pierres, de se confondre avec cet univers brûlant et impassible qui défie l' histoire et ses agitations!》(28)

に駆られたことが告げられている。

既にこれまで捉えてきたように人間に人生観的意味を与えてきた文化や，精神的価値をになってきたモラルや社会，あるいは世界観的価値となった文明や歴史を超越的に否定して，自己石化志向でもって到達しようとした世界が石によって象徴された原始的で無感動な世界であり，この世界こそ自分自身を含む全てを否定するという徹底した否定志向でもっても否定しがたい世界ではなかったのかと考えられる。そしてこういう破壊の意志を心の中に秘めた虚無主義者としての否定志向型の人間がムルソーであったと考えられる。

ムルソーは作者のように太陽や海を愛し，光とか匂いに敏感に反応しながら感覚的充足を好んだ。彼は又アラブ人のように単純で平凡な生活を甘受しながら自由気ままに生きた。

その彼は通常の仕事はちゃんとする平凡な会社員で，格別出世しようとは思わず，自分の人生に熱意はもたず，何かにつけ無関心な言動や態度をとる人間である。

彼は自分の感覚とか知覚あるいは官能を刺激することには関心もつが，社会とかモラルあるいは知的なことにはあまり関心示さず，それ故なんとなく無気力でなりゆきにまかせて生きているようなところがある。

そして母親の死を悲しむこともなければ葬儀の後その墓に黙とうささげることもなく又恋人マリイを愛することもなく関係を続けるが，だからといって彼に愛情が欠如しているわけではない。何故なら愛と憎悪，敬意と軽蔑，希望と不安といった反対感情の共存は誰れにでもあるものだし彼だってその例外ではないだろうから。ただ彼は友情ほど率直に愛情を感じ取れないからストレートにそれを打ち出さないのだ。

ところでその彼が仲間のレイモンの情婦のことでその兄のアラヴ人のことにかかわり合い，浜辺で強烈に輝く太陽の光にさらされて圧倒されながら，彼を脅かそうとして身がまえているこのアラヴ人のナイフの光の刃に眼をえぐられたようになりこの光の怪物的脅威から本能的に身をひるがえそうとしてこの男に発砲したが，倒れたこの相手に更に駄目押しかけるように四発も撃ちこんで殺害してしまった。

彼は後裁判にかけられた時殺害の意図もないままの犯行だと言ったが，二人は一定の距離を置

きながら相対しかつピストル対ナイフということで明らかにルルソーの方がアラヴ人より有利な立場にあったので，いくら太陽のせいで心身とももうろうとなっていたにせよ，身の危険が迫った人間の正当防衛行為にしては性急に過ぎるし，殺意がなかったとすればそれだけ自己防衛意識が過度に大きくなった人間の殺害行為ととられても仕方がないだろう。

そして結局彼は自分が犯かしたこの殺人を後悔することはなかった。

裁判で検事が「実際この男には魂というものは一かけらもない。人間らしいものは何一つない。人間の心を守る道徳原理は一つとしてこの男には受け入れられなかった」《……à la vériré, je n'en avais point, d'âme, et que rien d'humain, et pas un des principes moraux qui gardent le coeur des hommes ne m était accessible.》(29) とか「非人間的なもの以外，何一つ読みとれない一人の男」《……un visage d'un homme où je ne lis rien que de monstrueux.》(30) と言って彼の非人間的冷酷さを糾弾した時の言葉には「何一つない」という意味を四回もたて続けに繰り返してその意味が過度に誇張されてはいるが，確かにムルソーには自分の犯した犯罪に対する自責の念とか責任感は麻痺したような非人間性が感じ取れる。

彼の分身的側面になったメルソーが「非人間性に徹すること」《m'appliquer à l'impersonnalité》(31) とか「幸福にならず反抗すること」《ne pas être heureux, contre》(32) にとらわれていたように，ムルソーにはそういう非人間性を志向する心の内面が魂の空洞ともなったのであり，又自分の幸福を反抗的に抑圧しているから自分の幸福に心を動かしたり反応示したりもなかったのだろう。その上自分の犯罪を後悔もしない代りに自己弁護もしないというその自分自身に超然とした言動や態度が死刑の判決に有利に作用し，結局死刑囚として死を待つ身となる。

最後に死に臨んで彼は「世界の優しい無関心」《la tendre indifférence du monde》(33) にはじめて心を開くがこの世界はどんな世界であったのかは明示されていない。

しかし人生において死は絶対的なものであり，死を前にすると希望やキリスト教的悔い改めや永世などを含む全ては消え去ってしまう。

そして死ぬ時は死の恐怖に支配されて死んでいき又死んだ後は何もない無の世界である。

だからこそ彼は死に臨んで残り少ないわずかの生に執着し独房で過去の追憶にふけって空しい時をまぎらしたようにこれまでの自分の人生をあらためて幸福だと思い起こし又繰り返すとしたら同じ人生だと思ったのだろう。とすればこの世界は死によって限界づけられた人生の最終時点にあって精神的に圧縮され緊迫した魂の中の世界であり，彼がこの魂の中で彼の分身のメルソーが自らの死に不動性の観念で相対したように不動なものを求めたとしても不思議はない。そして又彼のこの魂の中には自分の人生を回顧しながら結局自分はメルソー同様与えられた自らの生を短縮するような自己破壊的な生き方をして生きながらえることを拒絶するようにして死んでいくのだ，自分は無の世界を空しく求めることもあったが，自分自身まで空しく否定するように死刑囚として空しく死んでいくんだという自分の人生に対する失望とか断念をも意識していたとしても不思議ではない。

結び

カミユは太陽の光に導き出された空，海そして大地からなる地中海の自然が貧困とか病気に基因する屈辱とか苦悩をその無関心な寛大さで受け入れてくれるようにとらえ，何のわだかまりも隠し立てもない純真さでこの自然に親しみ，同時に又彼の神聖さへの感覚と神秘主義的感性は公正厳密な自然の摂理と共にある非人間的荘重さを伴った世界をこの自然の裏側に感じ取っていた。彼の生まれ育ったアルジェリアの自然への愛着は生涯持続するほど深かったが，彼のこの自然への大いなる愛の背後には世界との崇高な一致をはかろうとする姿勢があった。彼のこの世界志向は人間的なものを超越する世界の永続的で不動で荘重な観念への超越的な同化志向であるが，それだけに又社会や人間の運命から遠ざかり，運命から逃れられない自分から超越的に自己離脱していこうという離人化傾向も認められた。一方メルソーやシーシュポスの石化志向には不動性とか不毛性との同化傾向が認められるが，カミユ本人の自己石化志向にも永遠で不動な抽象的世界への同化を目指して超越的に自己離脱するような上昇志向が窺われる。であるから双方の志向とも永遠で不動なものと同化しようとする超越的上昇志向と取れるが，それだけにそこには人間的なものから非人間的なものへ移行しようとする離人化傾向も認められる。しかし有限な存在である限りいくら観念の中で超越的に自己離脱しようとしても，現実の自己は超越的自己にはなりえないという自己矛盾の空しさは心の中に残りながらもその空しさは観念の不毛性と結びついていく。カミユ本人の自己石化志向にも永遠で不動な抽象的世界への超越的な上昇志向ならびに離脱志向だけでなく石の不毛性へ至ろうとする傾向があった。

無機質の石の世界は一見無限に見える空と同じく生もなければ死もないが故に反応性よりも無反応性，変化性よりも不変化性，豊穣さよりも不毛性を喚起させてくれる。

すなわち石の世界中心にとらえれば彼の世界志向も石化志向も超越的な自己上昇志向ならびに自己離脱志向であり，永遠性，不動性だけでなく不毛性も観念として内に含むものであると言えるだろう。こうして人間的なものから非人間的なものへ超越的に自己離脱していくことによって非人間性を最も体現しているのがムルソーだったと考えられる。

ムルソーはモラルや理性，常識（社会通念）に麻痺したかのように反応しにくくなり，そういう人間性の基本的構成要素だけでなく，個人の幸福の条件である愛とか富，利得心の充足にまで無関心に相対した。この不条理の主人公は又石の様に無機質的な人間であるから普段あまり人間的反応は示さずに恋人や自分の出世にも無関心な態度をとったのだろう。

そして彼が太陽のせいでアラブ人を殺害し，自分の犯した殺人行為をも反省しなかったことは，彼がいかに深く人間性を麻痺させ，人間的に無反応になっているかを窺わせてくれる。しかしながらムルソーが非人間的世界に同化してその結果自然に人間的なものに無関心で無反応な人間になったというよりも，人間性否定志向の意志が強く彼自身に宿っていたからそういう態度を取ったといえるだろう。何故ならムルソーを創造したカミユ自身自分を含めた全てを否定しようとす

る強烈な否定志向を石の誘惑に託したが，彼の石化の思想の背後には虚無的否を貫こうとする姿勢があったと考えられるからである。

つまり神に置き換えられた荘厳で非人間的な世界を内に含む地中海的自然は太陽の光に導き出された世界であるのだが，この世界の一部を構成している無機質な石の世界は人間の心の中に不動性,永続性そして不毛性のような象徴的観念を生じさせ,この自然を深く愛しながらそこに入っていくことはカミユにとってこの観念世界に同化してそれらの観念を受け入れることを意味した。しかしこれらの観念世界は同時に又生もなければ死もない非人間的荘重さをともなった世界でもあり，そして又人間の生命力やあらゆる力の限界を超越してもいるこの世界を受け入れているうちに，その当人はいつしか非人間的で超越的なものの感じ方，捉え方を自分のものにしてしまったことも否定できないだろう。

一方では又現実には到底到達不可能な不動で永続的なものに対して心の中に生ずる諦観とか失望は，人間とは本質的に全く相入れないその堅固で異質な物質に対する違和感も重なり，更に不毛性という無に連らなる観念に助長されて石の世界は諦観とか失望を超えて虚無と無感動の比ゆ的世界ともなる。

この虚無と無感動の世界こそ虚無主義者カミユの強烈な虚無的否（いな）の否定志向でも否定できないような世界ではなかったのか。

とすればカミユの青春の思想の基軸となった世界志向とか石化志向とは人生において絶対的に重い刻印を心にきざむ死に相対すべく不動性とか永続性を求めるだけでなく，これらの観念とは本質的に矛盾した不毛性，そしてこの不毛性に連らなる虚無と無感動の世界にもひきつけざるをえなかったことを示唆してくれる。

そして不動で永続的な観念世界も不毛性が虚無と無感動に連らなる世界も人間の生そして人間の死を絶対的に超越したりかつ又双方に絶対的に相対する世界である。

カミユはこういう超越的で絶対的な抽象世界を神のように神格化したが,その結果人間や社会,ひいては歴史や文明まで相対的に重視されなかったり，虚無的否（いな）の否定の対象にされることもあったのだろう。

作者の分身ともいえるメルソーもムルソーもなにかにつけて無意味だと判じたり無関心な態度をとる無感動型の人間だが，その超然とした態度の中には虚無的否の強い不定志向が秘められていて人間性やモラルを不定視して社会に反抗し殺人まで犯すが，死にのぞんで自己石化しようとして不動なものをくみとろうとしたメルソー同様ムルソーは残りわずかな自分の生に執着しながら死という極限状態を間近かにした魂の緊張せる収縮作用の後でもはや二度と生じない生命の高揚感，その膨張作用があったとすればそれはメルソーの不動性への高揚感にも似た，自らの死の代償に生も死もある自らの人生にけりをつけ，生も死もない世界への願望ではなかったろうか。

註

(1) Texte Alain Vircondelet, Albert Camus, Vérité et légendes, Photographies, Collection. Catherine et Jean Camus, Editions du Chêne, 1998, pp.17〜18.
(2) Albert Camus, Carnets I, septembre 1937〜 avril 1939, Gallimard, 1962, p.86.
(3) Ibid., p.30.
(4) Ibid., pp.37〜38.
(5) Aibert Camus, Le vent à Djémila dans Noces de Essais, Oeuvres Bibliothéques de la Pléiade, Gallimard, 1965, p.65.　ここではカミユは自らの世界志向性の特質を以下のように記している。
C' est dans la mesure où je me sépare du monde que j' ai peur de la mort, dans la mesure où je m' attache au sort des hommes qui vivent, au lieu de contempler le ciel qui dure.（私が死を恐れるのは私が世界から身を隔てるその度合いに応じてであり，持続する空を見つめる代わりに，生きている人間たちの運命に執着するその度合いに応じてなのだ。）
(6) Albert Camus, Carnets I, août 1935, Gallimard, 1962, p.18.
(7) Ibid., p.64.
(8) Pierre-Henri Simon, Albert Camus ou l' invention de la justice dans L' homme en procès, les Editions de la Baconnière, Neuchatel (Suisse), 1961, p.94.
(9) Texte Alain Vircondelet, Albert Camus, Vérité et légendes, op. cit., p.41.
(10) Ibid., p.51.
(11) Albert Camus, Préface de L' Envers et l' endroit dans Essais d' Albert Camus, op. cit., p.6.
(12) Albert Camus, Cahiers Albert Camus I, La mort heureuse, Gallimard, 1971, p.204.
(13) Albert Camus, Le Mythe de Sisyphe dans Essais, Oeuvres Bibliothèques de la Plèiade, Gallimard, op. cit., p.196.
(14) Ibid., p.196.
(15) Monique Crochet, Les Mythes dans l' oeuvre de Camus, Editions Universitaires, 1973, p.26.
(16) Laurent Mailhot, Albert Camus ou l'imagination du désert, Les Presses de l' Université de Montréal, 1973, p.230.　ここで著者は石の本質とか特徴を鋭く捉えて次のように表現している。
Sans durée que millénaire, sans nuance vitale, sans l' ambivalence de la terre, la pierre est le coeur dur, le noyau du désert.（千年もの持続性はなくても生の僅かな痕跡がなくても，大地の両面性がなくても石は非情な心，砂漠の核である。）
(17) Albert Camus, Carnets I, op. cit., p.190.
(18) Albert Camus, Le vent à Djémilà, op. cit., p.65.
(19) Ibid., p.62.
(20) Ibid., p.62.
(21) Ibid., p.62.
(22) Albert Camus, Carnets I, op. cit., p.75.
(23) Albert Camus, Le désert dans Noces, op. cit., p.87.　これまで取り上げたCarnets Iの1937年9月のFiesoleの箇所にもこの引用文と殆ど同じ内容の文がある。
(24) Monique Crochet, Les Mythes dans l'oeuvre de Camus, op. cit., p.44.
(25) Pierre-Henri Simon, Albert Camus ou l'inventaire de la justice dans L'homme en procès, op. cit., p.94.
(26) Albert Camus, Le vent à Djémila, op. cit., p.63.
(27) Albert Camus, Carnets I, op. cit., p.236.
(28) Albert Camus, L'Ēté, dans Essais, op. cit., p.830.

(29) Albert Camus, L'Etranger, Gallimard, 5-1964, p.143.
(30) Ibid., p.145.
(31) Albert Camus, Cahiers Albert Camus I, La Mort heureuse, Gallimard, op. cit., p.71.
(32) Ibid., p.71.
(33) Albert Camus, L'Etranger, Gallimard, op. cit., pp.171～172.